して今後地図から消えるのは淋しい.

5. *Orthosia limbata* Butler シロヘリキリガ(ヤガ科, ヨトウガ亜科) (**Fig.** 5)

1964. iv. 7, 遠敷 1♀. 自宅の誘蛾灯に来たのが初めてだが, その後 ♂♀ ともに採れた.

6. *Perigrapha honei* Püngeler スギタニキリガ(ヤガ科, ヨトウガ亜科) (**Fig.** 6)

1964. iv. 7, 自宅の誘蛾灯に飛来した 1♀を採集した.

7. *Fascellina chromataria nigrochromaria* Inoue エグリエダシャク(シャクガ科, エダシャク亜科) (**Fig.** 7)

本種は本県では今立郡池田町稲荷で池田第一中学校生徒藤原章子さんが, 1957. viii. 25 に採集したのが初めであり, 学校へ寄贈を頼み, 遠く池田町まで受取りに行き, 福井市郷土博物館資料室と陳列室に保管してある. 続いて福田久美氏が武生市宮谷で採集して天覧標本を作る時に寄贈を受けた. 写真に出したものは 1963. viii. 31, 小浜市遠敷で電灯に来た♂である. 広く採集できるが少ないようである.

なお採集地の標高は, 小浜市遠敷 (13 m), 中ノ畑 (300 m), 大野市鳩ガ湯 (550 m), 大野郡和泉村池ガ島 (650 m).

Wallace と出会った日本通の蘭医 Mohnike

～長崎で種痘を拡めた, かくれたムシヤ～

磐 瀬 太 郎

東京都港区高輪 2-1 伊皿子アパート 505号

野上雅生氏がやどりが, 47/48 号に紹介されたように, H. W. Bates と一緒にアマゾンでチョウを追った A. R. Wallace が, ひと足先に本国イギリスに帰ったのは1852年であった. 不幸にもこの時彼が持ち帰った標本の大部分は, 乗船の火災によって失われてしまった. 3年後, ワラス(高島春雄氏の説にしたがう. 普通はウォーレスと読む)は, イギリス, オランダ両国政府や, 王立地理学協会, W. W. Saunders などの力強い後援によって, 東洋の熱帯探検に旅立った. マレー, スマトラ, ジャワ, ボルネオ, セレベス, モルッカ群島, 西ニューギニア等の島々を, 現地人のカヌーと徒歩によって, 1万4千マイルにおよぶ探検をし, 12万5千余頭の昆虫や動物を採集し, 8年後 1863 年にイギリスに戻った. この間 1858 年7月1日ダーウィンがロンドンのリンネ協会で, 紹介発表した自然淘汰の説(進化論)は, 両者の友情と共に有名な物語りとなって残っている. 帰国後6年間標本整理にとり組んで一段落した 1869 年, The Malay Archipelago を出版したが, この本は今なお古典として, つきない知識の泉を提供している. わたくしも中学生の頃, 抄訳か紹介で読んだ覚えがあるが, 最近ニューヨークの Dover 社から 1922 年版完本の廉価版が出た機会に, とりよせて読んで見た. 挿し画を見ているだけでも, 地図を眺めているだけでも楽しい本である.

ワラスが最初にアンボイナを訪れたのは 1857 年の12月であった. アンボイナは, ほとんど2つの島といってもよい程に深く切りこまれた湾を抱く2つの半島からなり, 湾内の良港は, 香料群島としてオランダ領東インドのドル箱であるモルッカ群島の, 首都の所在地であった. この町は東洋におけるヨーロッパ植民地の最も古いものの1つである. ワラスはこの時, モルッカ駐在のオランダ医師の長 Dr. Otto Mohnike 宛の紹介状を持参していた. モーニッケはドイツ人であって, 英語の読み書きは出来たが, 会話は不得手であったのでワラスとはフランス語で話しを通じた. 彼は軍医や東インド会社のお雇い医師として, 長い間ジャワ, スマトラ, ボルネオ, 日本を歴任して, このアンボイナに来ていたのである.

モーニッケが長崎の出島に来たのは, 嘉永元年6月 (1848) で, 有名なシーボルトの最初の滞日 (1823—1830) と第2回の来日 (1859) の中間にあたる. 1855 年(安政2年)の天然痘大流行の時活躍した記録があるので, この

年まで日本にいたことは確実であるが，日本を去った月日は不明である．しかし後任のファン・デン・ブルック J. K. VAN DEN BROEK が 1855年に来任しているので，大体この頃までいて，次の任地アンボイナに移ったものと思う．彼は日本に聴診器や，新しい産科器械をもたらし，また嘉永2年6月バタビアから輸入した牛痘は，多くの日本人を救った．医学の他にも気象学その他を日本人に教え，出島のオランダ商館内に気象観測候所のもとを作った．モーニッケは 1850年カピタン J. H. LEVYSSOHN レファイスソンと共に江戸に参礼しており，日本人の性格，風習，日本の地質，地形，動植物にも通じていた．植物の知識は特に深く，彼の名はシーボルトの Flora Japonica にも載っている．ワラスは日本婦人の手になった美事な彩色の植物スケッチ集をモーニッケに見せられて感心しているが，誰の描いたものであったろうか．日本の植物の図といえば，1762〜6年頃再度来日したカピタン ANDREIS CLEYER (ANDREW CLEIR) のものが大先輩である．しかし我々に興味あるのは，モーニッケが海外生活の間に熱心に昆虫を集めていたことである．中でも北方系の奇麗なオサムシ，熱帯の豪華なタマムシやカミキリムシを集めていた．ワラスも甲虫には興味を持ち，鱗翅目の1万3千余頭に対し，8万3千余頭を採集している．

当時アンボイナにはモーニッケの下にハンガリー人の若い医師 Dr. DOLESCHALL がいた．彼はすでに重い胸の病いにおかされていたが，熱心にハエやクモを研究し，チョウやガも集めていて，標本箱の中にはメガネトリバネ *O. priamus* やオオルリアゲハ *P. ulysses* の美事な標本があった．FELDER が命名したイワサキコノハ属 *Doleschallia* や，ルリマダラ，シジミチョウ，セセリチョウなどの種小名に残っているのは，年代や産地から見てこの若い医師の名であろう．ワラスは翌 1858年の1月初旬テルナテ島に移り，ここの熱病の床から，ダーウイン宛に世紀の論文『変種がもとのタイプから無限に遠ざかる傾向について』を書き送ったのである．

さて，今までにモーニッケと日本の昆虫を結びつけて考えた人は見当らないのであるが，江崎先生の「昆虫学関係来朝欧米人一覧」(むし8巻2号，1935) にも無いかくれたムシヤであって，日本の医学，特に種痘術の歴史に残る有名な人物であるから，オオミスジの亜種に捧げる KAEMPFEL，ナガサキアゲハの亜種に捧げる THUNBERG，ナガサキアゲハとルリタテハの亜種の命名者 SIEBOLD という3人の次に，MOHNIKE を登録しておくのも無駄ではないと思う．彼の日本名は『慕尼缺』をあてた文献がある．これら4人の蘭医はツュンベリーがスウェーデン人である他は，みなドイツ人である．

本稿を草するにあたって，文献のお世話になった長谷川仁氏に厚くお礼申し上げる．(1967. 1. 15)

主な参考書 (本文中に出なかったもの)

古　賀　十二郎　　西洋医術伝来史，1943，日新書院
長崎大学医学部　　長崎医学百年史，1961，同学部
磐　瀬　太　郎　　日本蝶命名小史，1952，ニュー・エントモロジスト別刷
八　杉　竜　一　　ダーウインの生涯，1950，岩波新書

〔附〕 脱稿後さらに長谷川仁氏のご教示によれば，DOLESCHALL の名は C. LUDWIG で，1859年アンボイナで死んでいる．1856年蘭領インドの双翅目相と，インディゴの害虫に関する2篇の論文を発表している．(出典 H. A. HAGEN : Bibliotheca Entomologica, 1862, p. 176)．追記して長谷川氏に厚くお礼申し上げる．(磐瀬)

日本鱗翅学会会報 "蝶と蛾"
第19巻 第3・4号
日 本 鱗 翅 学 会 発 行
本部　大阪市東区今橋3丁目18　緒方病院内 (〒541)
振替口座　京都15914番　電話大阪(231)3255代
編 集 者　白水　隆 (福岡市六本松4丁目 九大教養部生物学教室) (〒810)
印 刷 所　秀巧社印刷株式会社
1968年12月31日 発行

TYŌ TO GA
(Trans. Lep. Soc. Jap.)
Vol. 19, No. 3 & 4
published by
The Lepidopterological Society of Japan
c/o OGATA HOSPITAL, Imabashi 3-18,
Higashiku, Osaka, Japan.
31 December 1968